

---

月 刊

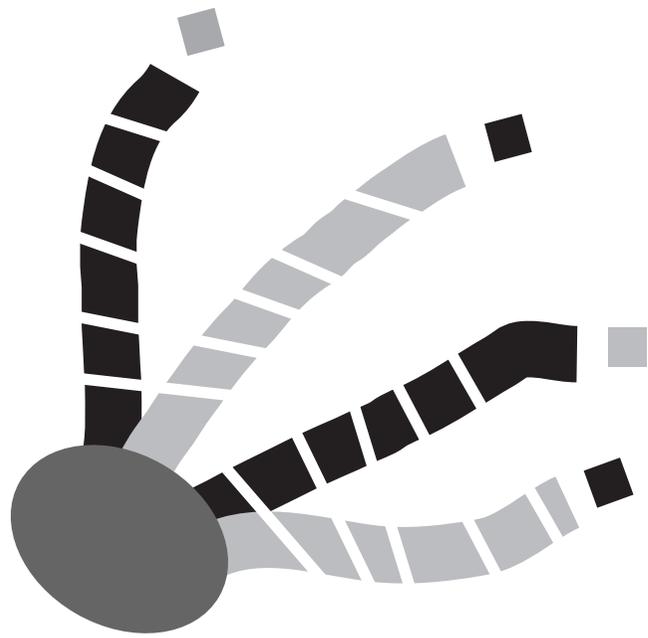
---

# MéLange

---

VOL.88

---



---

2014.01.26

詩と評論

---

月刊

「Mélange」

VOL.88

2014  
01  
26

月刊

「Mélange」

編集部

詩をどのように書くか? ..... 堀本 吟 3

がちがちの幸運 ..... 野口裕 4

何処より来きたりしものそ 眼交にもとな懸かかりて 安眠し寝さぬ  
..... 岩脇リーベル豊美 5

新しい手提げ ..... にしもとめぐみ 6

あけやらぬみずのゆ  $\leq$  水平線 ..... 福田知子 7

野だめカンターピレ ..... 川田あひる 8

都市に隠れ住むものの純粹夢 ..... 有時秀記 9

なぎさ ..... 大橋愛由等 12

(モノの干渉) カタツムリ ..... 高谷和幸 13

川向うが ..... 木澤 豊 14

波止場へ ..... 木澤 豊 15

柱時計は深く沈黙する ..... 中堂けいこ 16

春の一步 ..... 富哲世 17

夕星 ..... 上野都 18

銀河 ..... 寺岡良信 19

エッセイ

△神戸詞あしび▽11「焚書」 ..... 岩脇リーベル豊美 10

△神戸詞あしび▽77「リアル書店の消失 古書肆風羅堂閉店」 ..... 大橋愛由等 20

編集部だより★09/2014年がスタートした。第88回「Melange」の読書会は、木澤豊さんが発表担当。発表テーマは、好評の宮沢賢治の童話シリーズ第二弾「銀河鉄道」。著名な作品であるが、多様な読みが出来る深さがある。/1月25日(土)に神戸文学館で、兵庫県現代詩協会主催の「Poem & Art Collection 2014」イベントの一環として、〈足立巻一 詩と散文の仕事〉～兵庫・神戸を生きた詩人を語る Vol.02の司会役を担当した。語り手は、たかとう匡子さん。詩人、伝記作家、エッセイスト、ノンフィクション、ルポルタージュ作家と幅広く活躍した足立巻一さんの詩人としての再評価を試みたもので、今後も神戸・兵庫の詩人たちを論じていきたいと思っています。(大橋記)

◆詩をどのように書くか?

堀本 吟

老人はいまでも女を知らない青年のつもり  
老女はいまでも男を知らない乙女のもり

ごうごうと  
穂芒のなる  
山奥の花野  
ぐうると  
樹に囲まれ

野分の渦のまんなか  
そらはちいさくまるく  
まつさおに冷えている  
おひさまのように固く  
ひとときの静謐である

線路の光  
川の匂い

街は遠い  
駅も遠い

轍の跡も荒びた林道に  
公衆電話のボックスが  
たった一個立っている

穂芒の叢の根元にすわり  
熱い魔法瓶をあげながら  
男女の話題はただひとつ  
詩をどのように書くか?  
と いうことなのである

それは素寒貧のエロス  
透きとおりつつ男女が  
互みに刻みつける文身  
風の矢はしだいに鋭く  
もはや太陽も空も遠い

## ◆がちがちの幸運

野口 裕

「存在論は確率論である」とは  
古い物理学の教えであるが  
確かに進化論は偶然の隙間の必然を物語るようだ

南天の実が二つこぼれると  
芸能ニュースは誰かの離婚を語り  
三つこぼれると  
婚約話だとする  
変に生真面目な少年の考察を  
あながち退けるわけにも行かない

私を見る夢は三段論法で固められ  
崖下から聞こえてくるバイクの空ぶかしさえ  
三つ編みの一束になる

必然の隙間からにじみ出る偶然が  
あの日の震度7か

山火事は起こらず  
裏山暮らしの我が身は  
まだ生かされてある

## ◆何処より来きたりしものそ眼交に もとな懸かかりて安眠し寝さぬ

岩脇リーベル豊美

眼を瞑ると薄光ばかりがしゃぼん玉のように揺れている。  
チエックアウトが迫る時刻になってひよいなことから  
小綺麗なホテルの一室で見知らぬ男と寝ることになった。  
見知らぬというのは  
なにか身内に騒動が起こりそれが一段落したので  
わたしたちはとても親しげに話していたのだが  
夢から醒めると顔の輪郭と柔らかな感触だけが残っていて  
実在の人物なのかすら判別できないほど曖昧になってしまったから  
だ。  
むしろ彼はわたしの既知ではないと確信している。

わたしたちは裸で寝床に横たわっていた。  
暫く件の出来事の感想めいたことを伝え合っていたが  
いつの間にか堪えきれなくなり  
わたしから恥ずかしいと思うこともなくその人の肩に手を伸ばして  
求めた。  
真夏の白昼に海水を浴び火照りを清めるような抱擁のあと  
超過料金を支払った非実在である男にわたしはあなたを愛している  
と告げた。

だからもう眠りましょう。  
いえ、でも眠らないで。  
無限に白夜に近くさらに白い夜の祈りは  
熱帯夜に氷菓子欲しがらる幼児の言葉に意味を吹き込んだ。  
あなたはどの風に乗って遣つて来たのだろうか、  
あなたは何故わたしの先端を硬直させたのだろうか。  
わたしはどこにも属していない。  
そしてあなたはどこにもいない。

## ◆新しい手提げ

にしもとめぐみ

新しい大きな手提げを用意した  
真新しいバスタオル 下着  
歯ブラシにコップ 連絡ノート  
ひとつひとつ名前を書き入れて  
バスが来るまで一緒に待つ  
幼稚園児を見送る母のようだ

義母は無邪気に新しい手提げを喜んでくれる

いつも持っていた小さなバッグには  
バスのパスや老人医療の証書 鍵  
医院で支払うための小銭の五百円玉がたくさん入っていた  
「もう、こんなもんいらん」とぼつんという

## ◆あけやらぬみずのゆめ

### IV 水平線

福田知子

水平線は海から見るもの  
地球の外からは見えない  
それは大きな身振りではなく  
にんげんに赦されたパンドラの筐の底  
という神話の箴言でもなく

そうではなく  
自然な あまりに自然な 遙かなるものへのひとときの想い  
融けあうもの 融かしあうものたちが  
いだきあい 紡ぎあう  
たいらかな 結ばれ  
まだ見ぬ水宇宙の彼方へきゅんと胸焦がす  
手を伸べて 眼を細めて 宙にたくす四肢  
風をうけ 波音を聴き 半球の曲線を辿り  
しずかに しずかに

辿ること  
寄り添うこと  
ここにること  
息子イサクを生贄に差し出したアブラハムが  
なおも神に言ったように

年老いて足も悪いので一人で医者に通うこともなくなった  
手提げに入れておいた着替えの紙パンツは自分でだしてしま  
いつからかそばへよると臭うのだ  
もう長くお風呂にも入っていない  
洗濯の好きだった義母 洗濯は今でも自分でできるとい  
デイサービスのバスが来るのを一時間も前から待っている  
送りのバスにはいつまでも丁寧にお辞儀をする

もうこんなに こんなにも  
お地藏さんみたいに欲がなくなってしまった義母

何回も何回も同じことを話す  
何十年も一緒に暮らしていると話すことがなくなってしまう  
それでもお天気やニュースの話題を探して話したものだ  
もうそんなことすら疲れてしまい黙って食事をする

黙っている時間が何日も何ヶ月も過ぎた  
黙って食事することが苦痛になり そして  
黙って食事することも普通になつてしまった  
週二回のデイサービスを毎日行こうと用意をする義母

義母は無邪気に新しい手提げを喜んでくれた

——わたしはここにいます と

屈んだまま じつと  
眼をみひらき そうして  
すつくと起ちあがり  
指の先から伸びてゆく 指の向こうを  
見る  
視ている  
ひとと ひとの いきの つながる ところ  
指の向こう さらに向こう  
さらに さらに

神がにんげんのいきふきを忘れたころ  
あたらしい鹽の種がうまれる  
いくつもの掌から 殻を破って  
無数の鹽が芽吹く

鹽 鹽 鹽・・・

巨大な穴の時間から 数多のかけらの夢から 凍れる空間から

鹽 鹽 鹽・・・

鹽は堅く透きとおる  
そうして 微かな罅われから個々にわかればじめる  
つながり わかれゆく 海のいきふき うけて

## ◆野だめカンターピレ

十二歳の  
五人の起業家は  
町おこしをする  
川向こうに 学校はあるが  
五人それぞれの首からぶらさがる  
おもたいねんねこには  
骨がつまっている  
学校は 遠くどの道を行けばいいのか  
ブレーキがかかる  
「ハッシャバイ！」  
充電の カンターピレの音がかかると  
一斉に ひとえに 十二歳になり 横たわる  
かれらの胸は  
骨の  
在りし日の夢が鳴り

川田あひる

広がる  
その夢を育てる任務を遂行するいれこのゆめをみる  
半日眠るとはっしと目覚める  
ねんねこの襟は  
因習の糊がきりりと引き締まって  
骨が  
守られている  
不条理 を解析し  
きみどりの野だめを呑みほし  
この町を  
新しくするため  
開拓するため  
それぞれの余韻を  
苦心して  
書き込み  
勇気をだして 陽の中へ  
人ごみへ 出ていく  
今日いちにち  
学校を忘れて

## ◆都市に隠れ住むもの 純粹夢

有時秀記

都市に隠れ住むものの夢が像を結びはじめるとき、その夢靨のなか、ゆうに齢百歳を超える老翁が、車の往来する大都会の通りを一步内側に入ったあたりの東門をゆつくりとくぐりぬける。石柱の門の下をとおりるとき老翁の視線は石柱門の上部にかけられた扁額をひとなでする。やや白濁した眼は一瞬、光を集め、右手に持った青い杖をひとふりして前方を指し示すのだが、その指し示しによって意味されるのは瞑想領土の始まりである。杖の頭に彫られた龍も青く光り、照応しながら、中天に日がのぼるころ夢の舞台にはいる。

東門の内側は四方をかこまれた界域で、他の三方の門からも三人の百歳翁が歩み入る。いまひとりの老翁が、界域の中央にある正方形の基壇上で四人の老翁を待ち受け

ている。やがて舞いがゆつくりと舞われはじめる。やや冷気ただようなかでもおだやかな日の照る石舞台で、五人の百歳翁がそれぞれの杖を指揮棒のように持つて、ひとしきり舞いつづけ、おりふしに床を打つ杖が音曲をかなでる。

これら五仙の手にする杖の頭にはそれぞれ、蛇亀、朱い雀、白い虎、青い龍、それに鹿が彫られ、波のようになだよいながら、五仙の舞いに花をそえる。石舞台のまわりには三本の老いた古木があるが、舞いが佳境にはいると、やにわに白い花が咲きはじめ、日が西にまわるころまで、舞台の舞いを写す花の鏡となつている。ふと気づくと、鹿の杖をもつ老翁は盲いであり、五仙の身体は重力とは無縁で自由な蝶のさまである。日が西に傾いたときには、鹿の杖を除いて、四つの杖の頭の聖獣彫りが壇の中心に向けて静かに置かれ、舞いが終わる。五仙の十のまなざしは供された杖の頭から移り、上を見上げると、空からひらりひらりと白い雪が舞い降りてくる。そうして沈黙が雪をほめたたえ、舞台はしばし戒壇の様相となるのである。

舞い終えた五仙は鹿の杖を手にした百歳翁

を先頭にして、軽やかに東門へと歩き、門に近づくと扁額のあたりにまなざしを向ける。そこには西に傾いた日差しが射し込み、五仙の眼と瞳を通して、太陽系中心の像がそれぞれの心の深層にしみ込み、何かが脱け落ちる。この日想観のときに、まさに杖の鹿が「今ここがロクヤオン」と小さくつぶやく。鹿の杖はつぎの瞬間に門柱の上に吸い上げられ、びたりとその上に止まるのであるが、扁額には「東方中心」と文字が読め、五仙は西からの日の光を浴びている。

門の外、結ばれた界域の外にでると、車列の喧騒が五仙の姿を消してしまふ。とともに雪空のなか、夕日が地上から脱け落ちる。いずこかで、量りしれない無限をかたどった像の、その背後からも日の光が脱け落ち、鳳凰が舞い飛ぶのであるが、それらすべては夢のなかの事象である。

これらが都市に住むものの夢のなかで結ばれた像であったのだが、W氏のように「事象の論理像が思考対象である」と断定的につぶやくとき、仮の身体が灰化して雪空に融け入るといふ像の果てでなにごとかが脱落するのである。

暖冬と予言されていた中欧だが、この数週は例年通りの寒さが到来していたような気がする。勤務地のエアランゲンに居住地の詩人通りから一二〇キロほどしか離れていないものの、到着すると気温は数度低いことが多い。雪が路傍に寄せられて凍り付いているなか、乾いた寒気にバスをじっと待つのも辛く、その近辺を特に目的もなく歩いて廻ることがある。バス停の広場では、ユグノー広場というが、石畳に埋められた銅版の記念碑(写真A)に気がついた。ヤコブ病の発見者かと思つたが、そうではないらしい。ヤコブ・ヘルツは一八一六年二月二日バイロイトで生まれ一八七一年にエアランゲンで亡くなつてゐる。バイエルン州で最初のユダヤ人教授になつた医師であるらしい。彼の功績は学問というより、情熱的教師としてまた信条の医師として人々に慕われ、彼の死後に敬意を表して銅像が建てられたのだが、それは一九三三年には破壊され、今また回想されているという銘板である。

この町は第二次世界大戦の際、空爆を受けておらず、街の破壊は四・八パーセントに留まつていて、それがどんな割合なのかよくは知覚できないが、いつもの道から一本離れただけで、偶然にいろいろな記念碑に、それも教科書に出てくるような学者から、わたしは知らないが、世界的に知る人は知るといった、なんらかの分野でなんらかの功績をなしたという人の記念碑に出くわして感激することがある。たとえばそれがどういふ意味であつても。

宮殿が大学校舎の一部になつていて、その前が市の立つ広場なのだが、その石畳にはナチスによる焚書が行われたところ、つまり市場広場のどこかに銘版があることは、市史を讀んで知つていた。探すということもなく下を向いて歩いて



写真 A

くと、ほぼ広場中央、大学創設者であるブランデンブルクバイロイト辺境伯フリードリッヒの銅像のそばに「ここ一九三三年書籍が焼かれた」と黒ずんだ銅色(写真B)を眼にした。  
ナチス政権はドイツ国内で、ナチズムの思想に合わない書を儀式的に焼き払つた。一九三三年四月ドイツ学生結社が新聞やプロパガンダの手段をとつて、全国的に「非ドイツ的魂」に対する抗議行動をするという宣言をし、火による書物の「払い清め」を惹き起こす。学生協会は、ルターを意図的に連想させる12ヶ条の論題を起草し、ルターの95ヶ条の論題が投稿されて三〇〇年を記念したヴァルトブルク祭に合わせ、非ドイツ的書籍の焚書の計画を立てた。「純粹な」(排他的な、同義語である)国語と文化が提唱され宣伝された。論題は「ユダヤ人の知識主義とそれに結びついたドイツ精神の頹廢」の超克を要求し、ドイツ語とドイツ文学の純化の必要性が断言され、大学が「ドイツ民族の保育所」および「その精神

た。学生たちは、焚書運動を、全世界のユダヤ人のしたドイツに対する「組織的中傷」への応答としたという。カール・マルクスなどの社会主義的な書物や、ハインリヒ・ハイネ、エーリッヒ・ケストナー、ハインリヒ・マン、クルト・トウホルスキー、カール・フォン・オシエツキーなどの、「非ドイツ的」とみなされた多くの著作が燃やされた。儀式として行われたので、叫びの口上を伴うが、それらを見てみると、フロイトの前には「魂をささくれさす衝動の過信に対し、人間精神の高貴のために、このジグムンド・フロイトの書を炎に譲り渡す」とあり、マルクスが炎に譲り渡される前には「民族共同体とイデアリストの精神生活のために」と呼ばれている。

本は、古今東西を問わず、事が起こるたびに焼かれる運命にある。だが、自分の本を焼き払われるということはどういふものだろうか、それも、これまで教鞭をとつてきた学生たちや慕つてくれていた患者に、非ドイツ的であるという理由で、自分の書いた文字が純化という名のもとに焼き払われるというものは、どういふものだろうか。

レクラム文庫に『Lyrik des Exils (Hrsg. v. W. Emmerich und S. Heil)』という詩集がある。一九九七年初版。通常の黄色表紙だが20mmほどの厚みがあり、改訂版はページ数にして五一二である。「亡命の抒情詩」といふべきか、一九三三年以降帝国を開放された詩人たちの抒情が悲鳴を上げながら、しかしある意味で軽快に、時にはユーモラスに表現されていて驚く。

ブレヒトが描く「私を燃やせ！」はひとつの定言命法である。如何なる条件を必要としない命法である。それは「非ドイツ」への意志であるとともに、「非同一」への意志である。



写真 B

焚書  
ベルトルト・ブレヒト  
政権が、有害知識の記された書物を公に焼却せよと命を下し、そこかしこに  
牡牛が書物を積んだ荷車を  
薪の山へと牽くことを強いられた時、  
追われた詩人は、選り抜き詩人のひとりであるが、焚書リストを検証しながら、自分の本が忘れられていることを発見、驚愕した。彼は書き机に急ぐ、  
憤怒に羽ばたき、かくして権力者に宛て一通の書簡を書く。  
私を燃やせ！ 飛ぶようなペン先で書く、私を燃やせ！  
私を書き漏らすな！ 私を残さないでくれ！ 私は常に書物のなかで真実を語つてこなかったか。そして今や私は君たちに詐欺師呼ばわりされているのだ！ 私は君たちに命令する、私を燃やせ！  
(拙訳)

突堤の猫<sup>\*1</sup>にだけ聴こえていたのかもしれないとしても

「つかれました」とうなだれる冬の海<sup>\*2</sup>の幾重にも重なる

パステル色は潮目のあざやかさと共に自傷を繰り返す海

鵜<sup>\*3</sup>のつくり笑顔もまた渚に打ちつける波動によって伝え

られ「あとすこしなのです」との力のない声にもかかわらず

らず海象を響<sup>\*4</sup>ませながら出航間近の漂流船を見送る舞踏

家の目尻にも涙を産<sup>\*5</sup>出させ「春には」の発語をはばかり

悲しみを共有するのは漆黒の夜の海へ失踪する北風<sup>\*6</sup>である

う

\*1〈突堤の猫〉と交わした約束は（青）に満ちているのだがきつとそれは猫たちが白い波濤がさなみ立っている刻にふと思ひ浮かんだ巨魚の尾ひれと連関しているのだ

\*2〈うなだれる冬の海〉はぼくを悲しませるつもりで毎朝そっぽを向いているのかもしれないけれど新着の詩集を飛ばし読んでいる内に忘れてしまう程度のものだろうか

\*3〈自傷を繰り返す海鵜〉が語るその内容をまとめてみると冬の雲の上に発生し漂流している（気分）は全否定で構成されていて取りつく島がないために苦悩するのだと

\*4〈出航間近の漂流船〉の乗船チケットは三番窓口で売っているが教えられたのだが受付は禅師と自称する男でじろりと睨まれた後に渡されたメモは「受付は隣の四番へ」

\*5〈舞踏家の目尻に涙を産出〉させたために免疫力が低下してあげくには痙攣が起きてしまったぶん何かの憑き物に支配されているのだと花瓶の薔薇たちはおびえていた

\*6〈失踪する北風〉はやさしい性格でもあるし聞く耳を持たない性分であるとも言い得て火酒を呑みながら語りあったとしても分かり合えない仲であるかもしれないのだ

## ◆（モノの干渉）カタツムリ

高谷和幸

空から降ってくる電子レンジのアントワヌ||ローラン・ド・ラヴオアジエのまばたきよ。黒から白になり、転がっていく、眼球の「わたしという執着」。破れた袋の空を「あろうことか自分に恥入ることはないんだよ」。あれは突き出たあなたの「虹彩」、諸元素のオブセッション。風がやんだ夕べになると、無風の空から「カタツムリ」が降ってくる残余のわたしを、庭（そうだ、わたしは庭になつたのだ）がスノードームのように転がっていくのです。「マヘマヘ、カタツブリ」。書くことと書かないことが乾いた穴あきのエピフラムになつてしまった。「古い建物（マハヌモノナラバ）」。「ムマノコヤウシノコニ、クエサセテン」。虹の渦巻きのマイマイの抜け殻は雲の上から音もなく降ってくる。海から吹き続けた温かい上昇気流に乗って、カタツムリのあなたはペリカンに、つるりとしたペリカンの婚礼のうなじに似ていると、昔から思っていた。「託セル風ガ止マツテシマッタ」。「ここでのペリカンは鳥のペリカンではなく形が鳥のペリカンに似ていることからペリカンと名付けられた蒸留器を指す」。ニコラ・ロシユの義理の息子の前で、革命はまばたきの果てた死刑執行役人の職務のカウントダウンとちがわない。喩として数字を読み上げる「ひとびと」と聞こえない「ペリカン」。その交感する倫理を、執行役人のカウントダウンがうなじに刻み付けたもの（なんでこんなことになったのか分からない）、町内放送で流れた家系図の名前は、本当は夕空のかたまりの嘔み痕だろうか、あなたという恐怖症は物質の見えない出口を目視し続ける。庭の枯れた指と指の隙間に折れた脚の上上空から降ってくるアゾティコスのカタツムリたちよ。「地面の土に水は土になるな」と輾転とまばたいている。

## ◆川向こうが

木澤豊

川向こうの草原をわたしが  
歩いて行く それを見ているわたしは  
だれなのか  
背に波音  
山脈はるかに  
まともや 漂う あいだに置かれた  
わたしのかたちの 余白あるいは  
空虚 そうだ なにもない  
場所 でもなく

坂を登りつめると とつぜん  
道が断たれる  
眼下にに屋根の波がひろがっていて そのむこうが  
きょう 黒々とした海だ  
きょうは 知らない  
知らない

岩礁かと思れば  
白いホテルで 白亜と言いたいところだが  
あれは影 それとも剥離したペンキか  
剥離したわたしのすがた か  
だれかと会う場所である  
たとえば わたしとちがう わたしなどと  
河の向こう  
あるいは もう一つの町なみ

## ◆波止場へ

木澤豊

岸壁の倉庫の壁だと思つたら 巨大な船  
腹だった 見上げると並んだ円い窓の二つ三つ  
から あかりがもれている いま わたしは迷  
子になっているのを思い出す かもめホテルが  
目の前に建っているのに

かもめホテルは門の片側に(影の鳥)の  
彫像が迎えてくれるアプローチの手前 鉄のマ  
ンホールの蓋の隙間から あかりが漏れていて  
だれにも気づかれず 夫婦と子ども二人が暮ら  
しているのが見える その見えない町を なぜ  
かれが知ったのか

この町のふちで飢えたかもめの群れは  
波のなかへ落ちるように急降下する あいつら  
は証明する 昇るためには落ちることができな  
ければならないと かれらは群衆のように言い  
つる

あるいは もうすぐ 到着するところ  
かなた と呼んでも 踏み外しはしない ここ  
草原といつてもいまは青々と広がっているのじゃなく  
海辺に沿って枯れ草がそよいで  
川向こうと言っても  
海向こうと言っても

町はずれて 人はずれて  
かすかな薄荷のにおいが  
わたしを戸惑わせる  
わたしが戸惑う これは  
いかなる仕業でもないけれど そうなったのだった  
窓に光る夕陽が消えかっていた

木の箱を山積みにした汚れた軽トラックが  
がたがたと橋を渡って うすら闇にとけて行った  
箱に押されているのは 大きな黒いマークだった  
起源という つまり故郷という暗い大きな  
罟が待っているにちがいない  
まあ この終わることがないうた  
いまごろ 川の向こう  
草原のハルノゲシが倒れているだろう

この辺りかあ  
ホテルのドアの 冷たいノブをゆっくり回すと  
目の前に潮流が騒いだ  
鉄さびの船腹が目を遮った  
旅立つか 住むか  
それとも

客船は町のなかへ移動を始める 地下道  
のバーでは黒いセーターの小さい男が椅子に止  
まり ショットグラスのウイスキーをなめてい  
る わきに置いたコップの水が ゆっくり流れ  
出して 裏通りのさらにまた折れ曲がった路地  
へむかう 巨大な鯨のなかの 地下道の飲み屋  
で皿に触れるナイフががちつと鋭い音を立てた  
ここで(希言は自然なり)という老子のことは  
が立ち上がる バーテンダーが言う もう一杯  
いかがですか

地下度の小路の突き当り 託児所のノギ  
ク模様の絨毯の上で数人のこどもが 木製の夢  
の汽車を押して 緋織りむの上着の娘が子  
どもを見守りながら 地上に次々にあらわれる  
駅を通過する電車の ひびきに静かに耳を立て  
た

夜明け われら放浪者はみんな 夜風の  
方角に手を振って送る 彼女のなかの青い水面  
を 黄金のイルカが ゆっくり跳ねて

## ◆柱時計は深く沈黙する

中堂けいこ

秒針のなめらかな動き。針先はよどみなく円周をたどりもはや一分をすぎず。右下に下りるときは少し速く左半円を上がるには少し遅くなる。それでちょうど差し引き一分が刻まれるという寸法だ。

あなたは時守だから時をうたうには時を使つてはならない。漏壺から滴る水分が溜まる、その速度を計り、一分一時一夕一朝を告下へのどをつまらせる。ひと刻みを表示してしましても音波が押し寄せ、秒針はすばやく数字を探すのだった。

水分の乾湿が及ばない地下深く、うすぐらい石柱に囲まれてわたしは海馬の背をまたぎ告下しなければならぬのだった。

古い家をたずねて、町を大きくはずれ踏み道もあやしげな先にそれはあつた。見るからに年季のはいったく折れそうな、しかし傍らに植わった銀杏が金色に葉葉をひろげてみせ陋屋をいつそう怪しげに引き立たせていた。三階建ての木造で切妻の出入り口の手前には切り戸が開いて、板を互い違いにうちつけた仕切りに見覚えがあつた。

畳の部屋にテーブルが置いてあり、兄と父の従兄弟が甘栗を剥いている。栗はころころしながら、黒くつややかになりどんどん数を増していく。彼らを懐かしい人々と知っているが、記憶にないのだった。だがなんの不思議でもなく、眼前にあ

ることをこうして描写できるのはわたしが時守だからにちがいない。

若いままの祖母が籐椅子に腰掛け輪編みに忙しい。父の従兄弟はまだ幼児だった。ここに父も母もいないことはわかつていた。あと知らない人が何人かいて、皆わたしが来るのを待っていたようだった。各人がうなずきながらこちらを一瞥する。

わたしは誰かと手をつないでいた。その人はあなたはちゃんとしているのかと問う。わたしは声にならない声でうなずく。喉のあたりが急に熱くなり、小さな子供がわたしの孫や曾孫で、彼らはわたしと誰かとの係累であるらしかった。

銀杏の葉葉が開け放した縁側からいつせいなだれ込み、部屋全体が黄色く染まったとたん家が傾ぎはじめる。襖が大きく倒れこんで隣室があきらかになる。そこは床の間のついた座敷で絨毯が敷き詰められ、缶から伏せたような箱に腰掛けて軍服の男がいた。黒の丸レンズのめがねをかけ日本刀を杖にしてハバナをくわえている。片膝をもう一方の足に乗せ、ヘイトジャップ！ニューズウィークの表紙になった祖父だった。胸底に響く：クヴァジェ：祖父の発したフランス語の唯一、わたしの耳骨が覚えている発語であつた。

顔を上げるとそれは一頭のローランドゴリラでバナナを欲しがるのでわたしは皮をむいて指先で一口ずつ千切り口に入れてやる。何か言ったのか、つなぎのネルの寝巻きを着て父は口を開いている。あつというまにバナナが無くなり、熱風が吹いてやつと秒針がひと回りするのだった。

## ◆春の一步

富 哲世

掃き寄せられた三日前の雪が

アスファルトの上に

秘密の

山の形に凍りついたまま

純白の喜びに到ろうとして

水の消息をたずねるように

道を割る何気ない仕草に

呼び重ねられたのだ

深々と

差しのべられた手に

疲れた夢の毛並みが触れ合うとき

囀りをそらに隠して

苦しむところに

ことばの静寂がひとり寄り添う

束の間

汚れを知らない

生きる傷や綻びが

瞬間の朝日に

歌い始める

◆夕星

上野都

十二面・千手・千眼・観音・菩薩  
 右に五百  
 左に五百  
 千の手をびつしりと重ね広げ  
 分厚く小暗い翼のよう  
 手というものに  
 これほどの逃れようもない呪縛  
 飛ぶことにも  
 持つことにも  
 地に立つしかない一本の手から  
 放縦に抉り出された虚空  
 千という無限に押しとどめ  
 血の通う身の丈に積むことも叶わず  
 いまだ 冷徹に  
 彫り跡も見せずに立ちつづけて

千の手に千の眼  
 限りあっても見えないまま  
 なお 遠く  
 眼はどこへ走るか  
 揺らぐ蠟燭の炎に射ぬかれ  
 眼ほどの果ての日に結ばれるか

自ら在る音を聞けと  
 夕ぐれの風が吹き下りる一月の庭  
 血と肉を張りつめた熱い怠惰に  
 閉じ切ったかりそめの無音  
 千年の向こうから  
 抱え込んだ放逸と収斂  
 滾る喉元に刃のように合わされた掌  
 扉に鍵をかけ  
 中に在るものを忘れる  
 引き返す道の短さに  
 小川の瀬音を閉じ込める  
 観てしまった眼  
 聞いてしまった音  
 地になった天に冬の夕星。

◆銀河

寺岡良信

密漁は寂しいたづき  
 星くづばかりが投網を洩れて  
 火を焚けば  
 黎明は記憶に溶ける  
 わたしたちは  
 いつ森を逐はれたのか  
 ショーヴェ  
 アルタミラ  
 ラスコ  
 洞窟に仰臥して描いた指には  
 満月に火傷した痛みが  
 まだかすかに  
 烙印を押されてゐるか

― 出棺は星の嗚咽が濁るときに  
 だが  
 わたしの  
 死後も  
 わたしの  
 息子たちの死後も  
 永劫につづく  
 深い  
 森の喪失  
 牡牛は牡牛座となつて  
 蒼く凍つた  
 密漁は寂しいたづき  
 まして冬の銀河は



閉店まぎわの13日、友人たちと風羅堂に赴き、本を選んでみた

## リアル書店の消失 古書肆風羅堂閉店

二年八カ月の営業期間だった。詩人・大西隆志氏が経営する「古書肆・風羅堂」が一月末をもって店舗営業を終了した。文芸・評論の分野においてきわめて高度な本を扱っていたので、閉店がおしまれる。

この古書肆は、単に書店（『本を売る』というだけではなく、音楽やトークショーといったユニークな企画を店内で展開する姫路の都市文化の発信メディアでもあった。おりしも今年NHK大河ドラマで姫路にゆかりのある黒田官兵衛が放映される年であることもあって、存続していたら、姫路の都市文化の核となりえたかもしれない。

\* 古書肆に対して私の思いは深い。母方の祖父である岸本邦巳（1895～1984）は、戦前

は新刊書籍、戦後は古書肆を神戸で営んでいた。幼い頃から、母に連れられて祖父の経営する元町商店街のなかにあった「元町書院」によく顔を出していった。私にとって古本の臭いは祖父の臭い

あり、嗅ぎ慣れた生の嗅覚の一部を構成していた。

幼く背が低かった頃は店内のうず高く積まれた書棚の下の方しか見ることは出来なかったが、成長して背が伸び、世間と本の読み方の知見が少しずつ広がっていくにつれて、棚全体のジャンルを見通すことが出来るようになった。つまり私の知見の広がりは、店内の書籍を俯瞰する高さと同期していったのだ。

祖父が書籍に囲まれて生活していることも影響していることが影響したのだろう、いつのまにか私もそれにならうように、私の私的空間（書齋）は書籍に埋もれ、うず高く積まれた場所となっている。

書籍は、読書のためという自己目的な理由で購入する場合もある。ある年齢に達した頃から、なにかの文章を書くためとか、文学シンポジウムを企画・準備するための参考資料として購入する場合が増えていった。さらには、詩や俳句といった文学表現をしているので、所属するメディア（詩誌、俳誌）の表現者から書籍（あるいは定期刊行物）が寄贈されてくることもあって、増え続けはするが減ることはない。

その上、わたしは出版業（図書出版まろうど社）を営んでいるので、少なからぬ在庫を抱えている。これがまた頭痛の種である。新刊を出すたびに、在庫の置き場所を確保するのが重要な仕事のひとつとなっている。

\* さて、リアル書店（最近流行りだした言葉でネット書店に対して、店舗を構える既存の書店の意）を閉じた大西氏ではあるが、ネット販売は続けるという。この「書肆風羅堂」は私にとって大きな意味を持つている。二〇一二年に上梓した私の第一詩集『明るい迷宮』の版元であるのだ。著者である私にとって、奥付に記載されている版元の住所に、その出版社がないというのは、一抹の淋しさを覚える。エネルギーシユな大西氏のことであるから、リアル書店の閉店にこだわらず今後も活動を続けていくものと思われるが、いまのところ「書肆風羅堂」の唯一の著者である私は、今後の活動に注目しているのである。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.88  
めらんじゅ

2014年01月26日 通巻88号  
発行所/月刊『Mélange』編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F  
編集人/大橋愛由等（『Mélange』同人）  
Mobile 090-5069-1840  
maroad66454@gmail.com  
定価 500円（税込）